浦　田　遺　跡

筑紫野市文化財調査報告書
第 21 集

発　行　筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印　刷　株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目6-41

浦　田　遺　跡

福岡県筑紫野市大字山家所在遺跡の調査

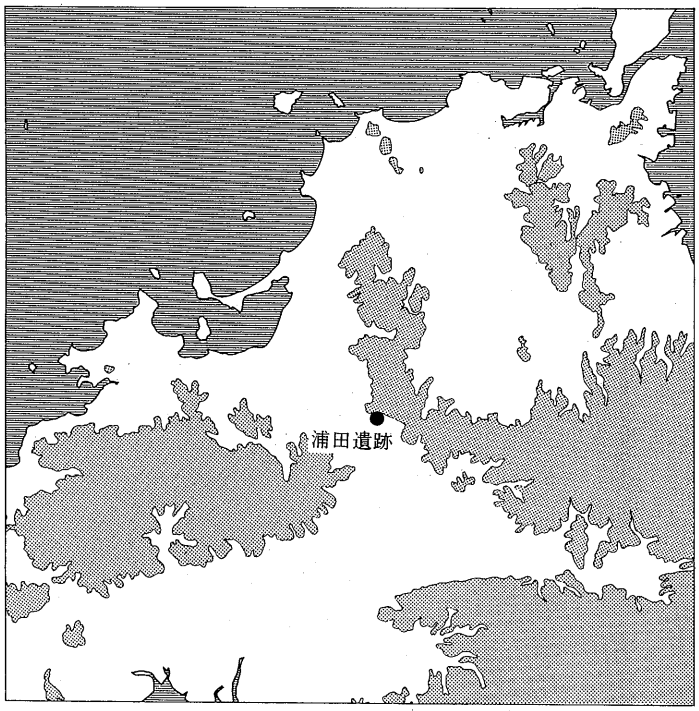
筑紫野市文化財調査報告書
第 21 集

1989

筑紫野市教育委員会

浦田遺跡　筑紫野市文化財調査報告書　第21集　筑紫野市教育委員会

浦　田　遺　跡



序

筑紫野市は、東西から三郡山塊、背振山塊が迫り、福岡平野と筑紫平野の境に位置する太古からの交通の要衝であります。このような環境をもつ当市は、山間部から平野部に至るまで多くの遺跡があります。

今回報告いたします浦田遺跡は九州電力株式会社の依頼をうけ発掘調査を実施したもので、筑後平野に向かって開いた沖積地の最も奥まった所にあります。

ここに発掘した調査結果を報告書にまとめました。この報告書が古代史解明の一資料となれば幸いです。

平成元年３月31日

筑紫野市教育委員会
教育長　永　渕　正　敏

例　　言

1．本書は福岡県筑紫野市大字山家3720番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は九州電力株式会社福岡支店の委託を受けて、筑紫野市教育委員会が実施した。
3．現場での実測、写真撮影は奥村俊久、向田雅彦が行った。
4．本書の執筆、編集は奥村があたった。

本　文　目　次

頁

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査の内容 …… 3
Ⅳ　小　結 …… 3

Ⅰ　調査に至る経過

九州電力株式会社から昭和63年10月19日付けで220kV送電線西福岡線新設の関連工事として同北九州幹線№5 鉄塔の建替のため事前に文化財の有無の照会がなされた。当教育委員会で照会地を現認したところ旧鉄塔内にマウンドを確認した。古墳の可能性もあると考えられるため九州電力の承諾を得、十字にトレンチを設定し調査した結果、石組の一部分が検出された。さらに協議を実施した結果、既に停電を含め工事計画が完了しており、緊急に発掘調査を実施することとなり、発掘調査委託契約書を筑紫野市と九州電力株式会社福岡支店との間で締結し、発掘調査を開始した。発掘にあたっては先の理由により調査作業に支障および危険を及ぼさない範囲の建替工事も併行して進行することとなった。

調査組織は下記のとおりである。

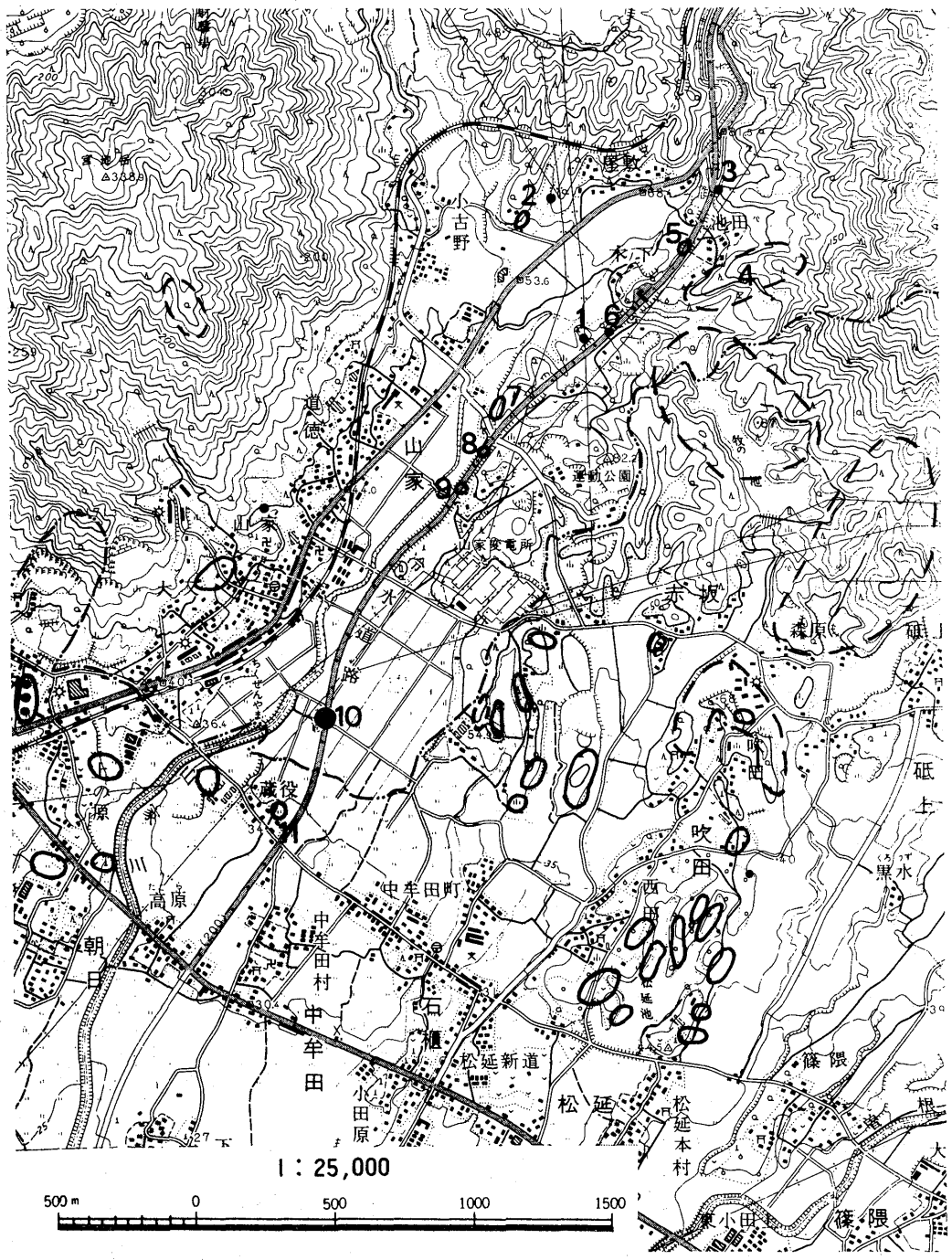
総括	筑紫野市教育委員会			教育長	永渕正敏
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課		課長	川原孝之
		社会教育課	文化財係	係長	山野洋一
				主事	奥村俊久
調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財係	主事	奥村俊久
				嘱託	向田雅彦

発掘作業　藤井清人・田中政明・木村正人・石井幸雄。

Ⅱ　位置と環境

浦田遺跡は福岡県筑紫野市大字山家に所在する。

筑紫野市は、福岡市の南19kmに位置する。北西に福岡平野を、南に筑紫平野を望み、古代からの交通の要所である。市内の北西には鷺田川があり、御笠川と合流して博多湾に注ぐ。東には筑紫平野を潤し、筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川やその支流ぞいには数多くの遺跡が所在する。宝満川上流域から宮地岳（337m）を挟み東側にその支流である山家川が流れる。山家川は山家冷水道沿いに下り、筑前六宿のひとつである山家宿の東側を肥沃な平野を潤しつつ流れる。宮地岳には円文や楯が描かれている殿様塚１号墳をはじめ多くの古墳があり、山家川を挟み対面する平野部には、圃場整備[註1]や送電線鉄塔工事[註2]、国道200号冷水バイパス建設[註3]等に伴う発掘調査で弥生時代から奈良時代に至る集落や墓地が所在することが知られ



第１図　浦田遺跡周辺遺跡分布図

1.浦田遺跡　2.丸隈遺跡　3.池田８号墳　4.池田1～7号墳
5.池田遺跡　6.池田９号墳　7.浮殿Ａ遺跡　8.浮殿Ｂ遺跡
9.浮殿Ｄ遺跡　10.大島遺跡　11.八ヶ坪遺跡

た。さらに山家川沿いに上ると平地は狭くなり、中世後半の遺跡である丸隈遺跡[註4]がある。山家川を挟み対面する尾根上に浦田遺跡は所在し、北隣の尾根には池田古墳群9号墳[註5]がある。

註

註1　県営圃場整備事業に伴い昭和60年度から筑紫野市教育委員会および夜須町教育委員会が発掘調査を実施している。

「夜須地区遺跡群Ⅲ」 夜須町文化財調査報告書第9集　1988　夜須町教育委員会

註2　「山家地区遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第19集　1987　筑紫野市教育委員会

註3　「冷水バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告」 1982　福岡県教育委員会

註4　「丸隈遺跡」 筑紫野市文化財調査報告書第16集　1987　筑紫野市教育委員会

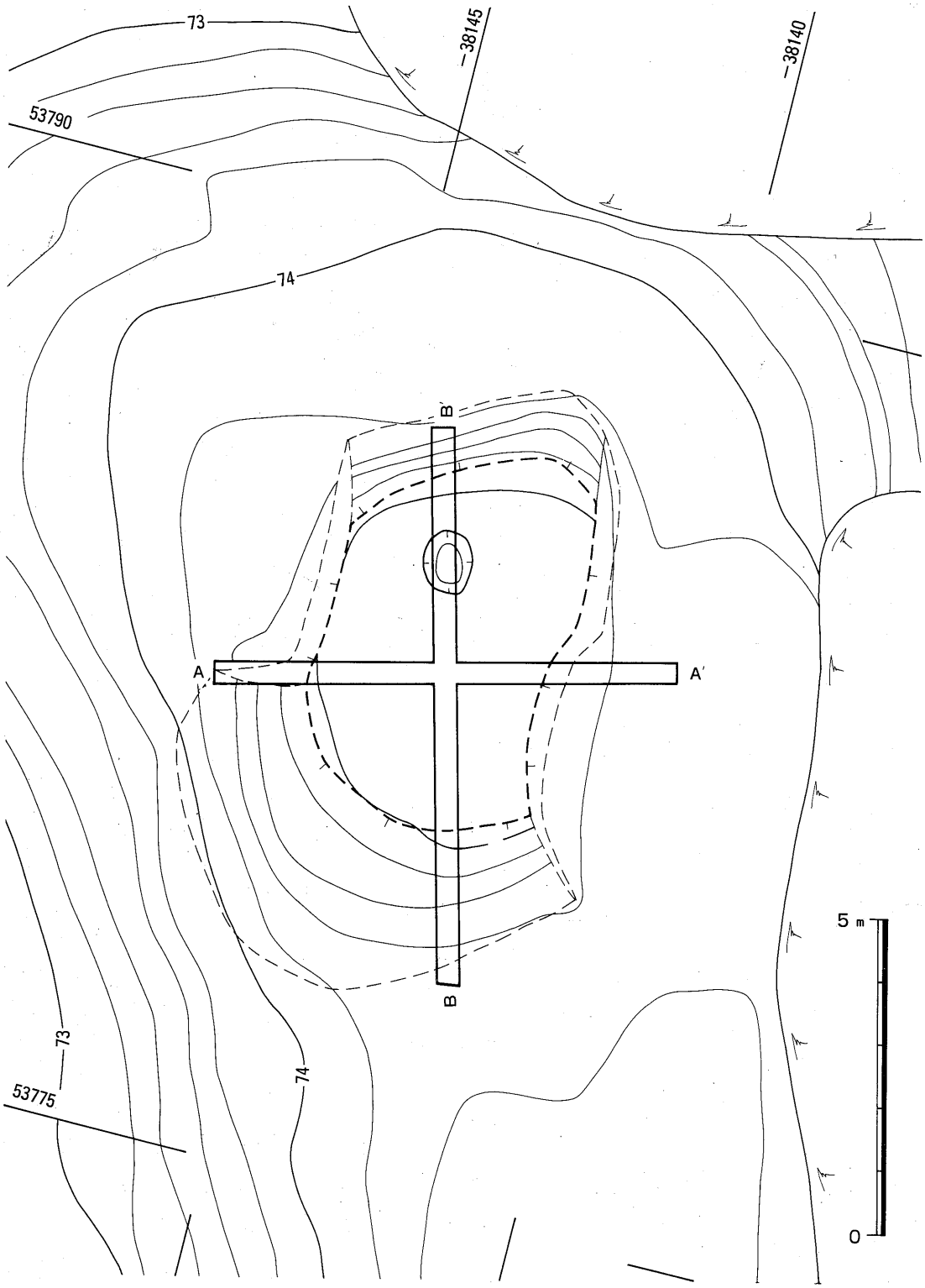
註5　註3に同じ

Ⅲ　調査の内容

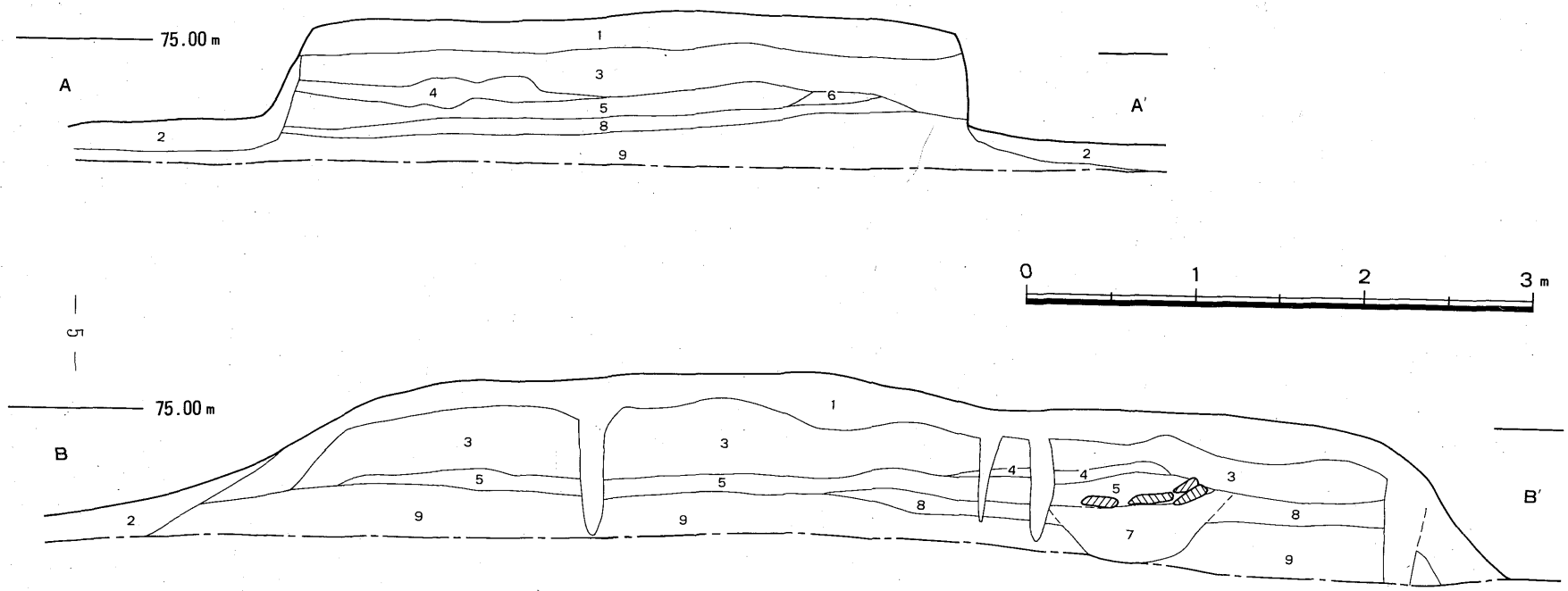
マウンドは、以前の送電線鉄塔建設に際し、削平を受け本来の形状はかなり失われているが、南側はほぼ旧状を残していると思われる。残存部は裾部で最大10mを測る。マウンドの中心から北側に1.5mほど離れて石組が検出された。石組に用いられた石材は花崗岩の河原石で、遺跡直下を流れる山家川で容易に採取できるものである。石材には二次的に加工した跡や、火を受けた跡は見られなかった。石組は土壙内に粗く組まれ、土壙上面では石組の外回りにも石材が配される。土壙は100～80㎝程のやや方形に近い楕円形を呈し、深さは60㎝を測る。マウンドはこの石組構築後に盛られる。マウンドは最終的に全部除去したが、外に遺構は検出されなかった。

Ⅳ　ま と め

浦田遺跡ではマウンド下から石組が検出された。この遺構の性格や時期については、遺物等が全く出土しなかったため明確にしがたい。石組の検出中は経塚を思わせたが、基底部から積み上げられたものではなく、かなり粗く囲いながら置いたという感じである。内部には有機質の何かを埋置したと考えられるが、それが何であるかは不明である。時期も経塚を思わせる形状から中世頃のものと推測も出来るが、積極的な事実を上げることができない。周辺部の一層の歴史的な解明と類例の発見を待ちたい。

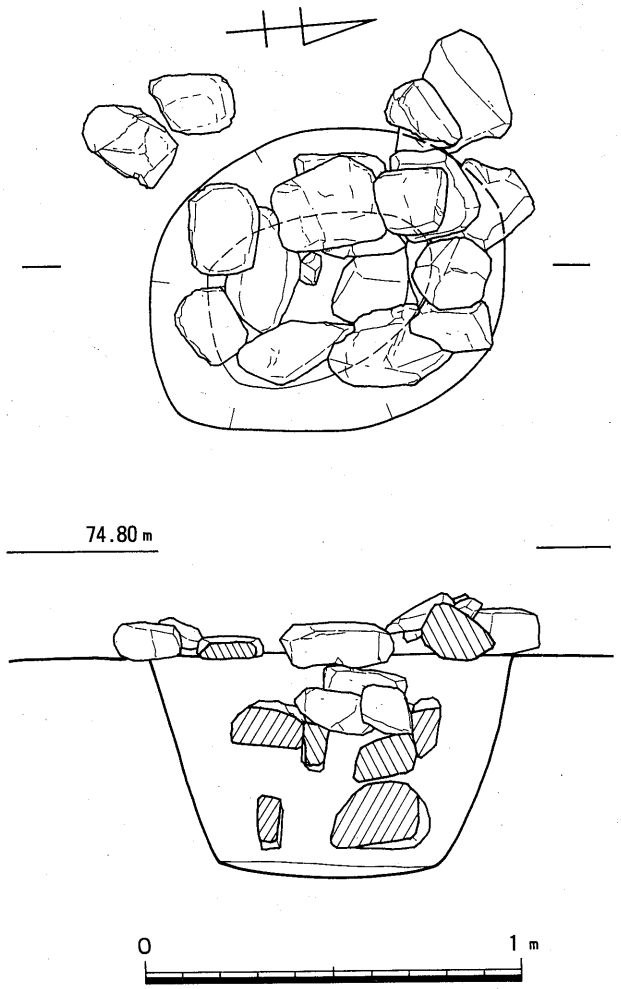


第３図　マウンド測量図（縮尺 1/100 ）



1．黒色土（表土）
2．腐食土
3．黄橙色土（微粒砂を多く含む）
4．黒褐色土と赤褐色土との混合土（微粒砂を多く含む）
5．赤褐色土（微粒砂を多く含む）
6．明黄褐色土
7．灰褐色土
8．黄灰色土と黄褐色土との混合土
9．黄褐色土（地山）

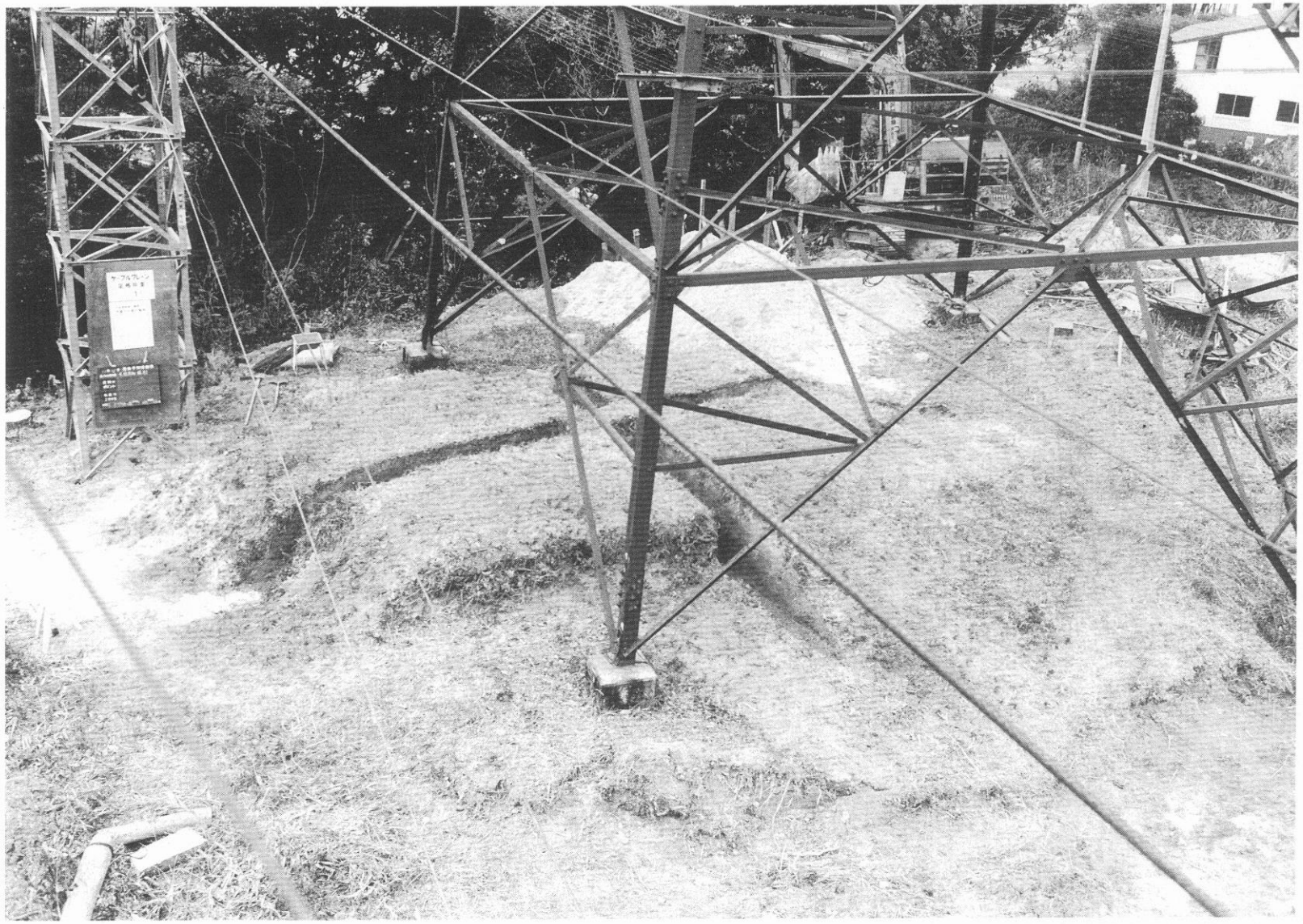
第４図　マウンド断面実測図（縮尺 1/40）



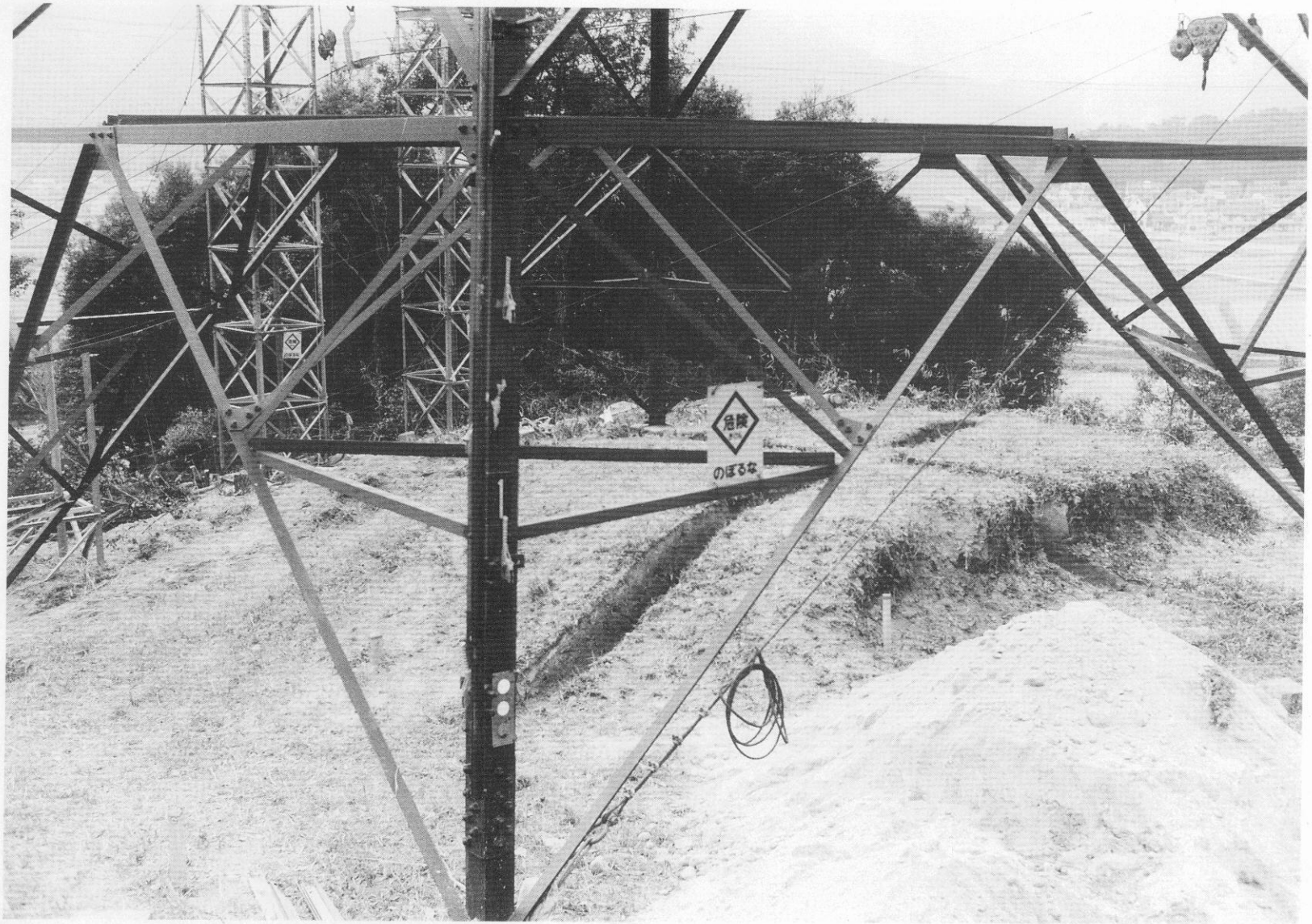
第５図　石組み実測図（縮尺 1/20）

図　　版

調査区遠景（北西より）

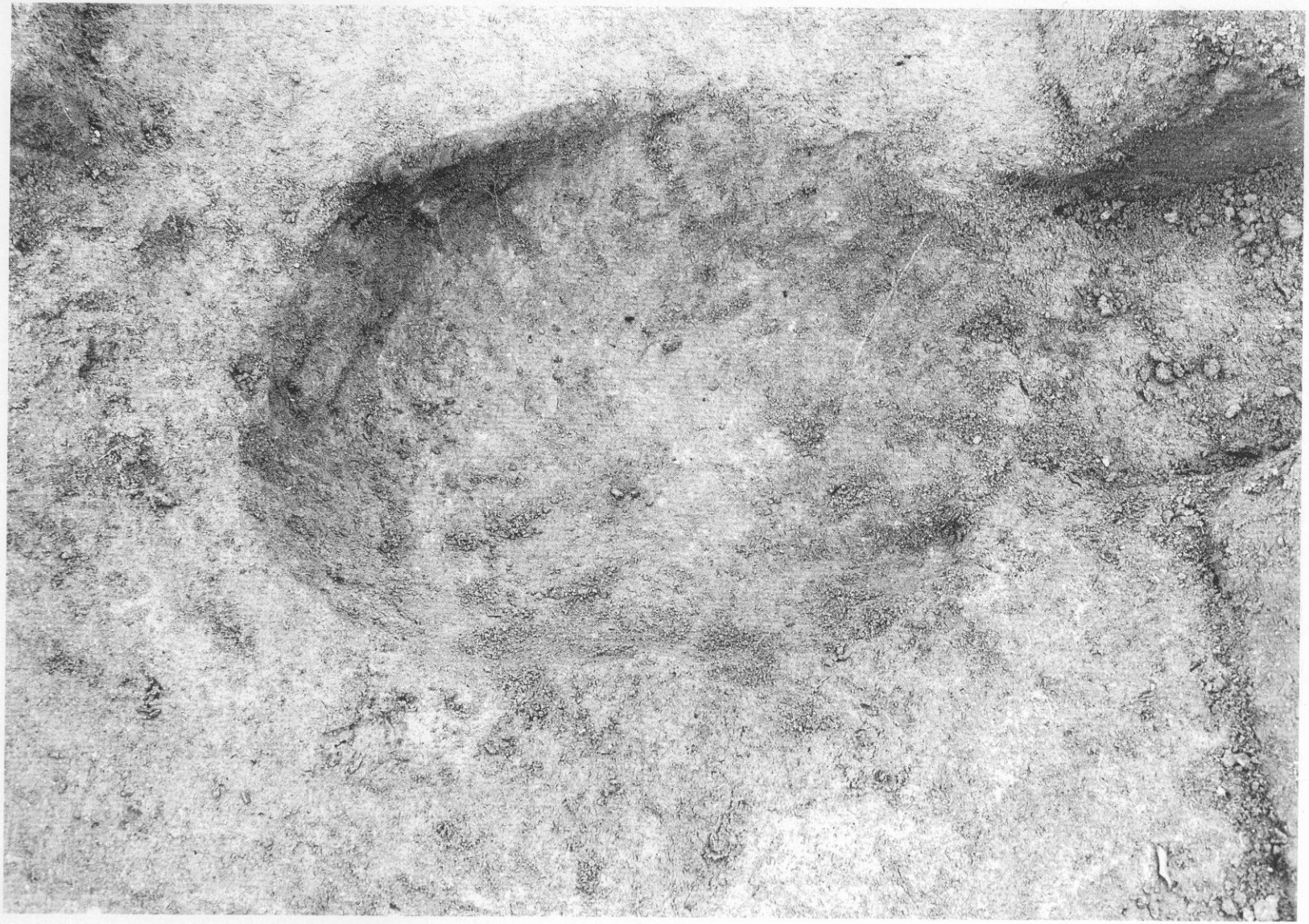


図版1　マウンド全景（南西より）



図版2　マウンド全景（北東より）

図版3　石組み（西より）



図版4　土壙（南より）